「ひきこもり」の子どもたちを再び社会へ。これまでにない勉強会の実施で成果をあげる。

「ひきこもり」は長期にわたって社会参加できないでいる状態や症状をさす。こうした子どもたちの社会復帰をめざす「わたげの会」では、2007年これまでにない手法の勉強会を実施。子どもたちの心を開き、勇気づけるという面で予想以上の成果をあげた。

保護者に対する研修会の様子

「ニート」や「ひきこもり」は社会全体が招いた現象だ。

社会が複雑化するにつれ、その変化についていけなくなる人たちが現れる。ひきこもり、ニート、登校拒否などは、学歴優先社会や利益優先の雇用形態などがその遠因になっているのだが、今の日本は全て個人の問題と片づけてしまい、彼らを救いあげる機能は乏しい。

「わたげの会」はそうした人々の社会復帰を手助けする特定非営利活動法人である。同会の活動はあまりに多岐にわたっていて紹介しきれないが、メニューだけでも相談会や家族の勉強会、学習支援、就労支援、生活訓練施設の他、さまざまなイベントの運営を行っている。

「状況は人によって違うので支援策も多様になります。たとえば、学力的にはかなり優秀で夢もあった子が、大学に行ってみて挫折します。それは受験勉強ばかりしていたために、他人の中でもまれてこなかったからなんですね。勉強やインターネットは一人でもできます。でも社会に出ればそうはいかない。それで人づきあいに悩んでしまう若者が今日本にはどこにでもいるんです」と同会理事長の秋田敦子さんは語る。

子どもが少しケガをしたくらいで大騒ぎするような過保護な親も増えてしまった。だから、親を対象とした勉強会も必要なのである。

そうした勉強会のひとつとして今回初めて試みたのが、2008年2月28日に秋保リゾートホテルクレセントで行われた自立支援勉強会である。大きな特長は、親ではなく本人たちの勉強会であったことと、「働くとは」「社会とは」「個性とは」「自立とは」という4つをテーマとした分科会に分け、本人たちが選択して考察したことにある。

初めは親のせいにしていた子どもたちが勉強会を通じて、自身の責任に気づく。

分科会の1部では、自己紹介のあと「どんなときに元気で、どんなときには元気ではないのか」が話し合われた。「元気でないのは一人ぼっちでいるとき」「元気なときはわたげに行けるとき」そんな回答が子どもたちから出てくる。

よく考えてみれば、ひきこもりの自分も、みんなといっしょにいたいというのが本音なんだとわかってくる。彼らにすればこれだけでも大きな発見なのだ。

■助成団体
特定非営利活動法人 わたげの会
http://watage.or.jp/

「フリースペースわたげ」にいるときはとても明るい子どもたち

スポーツを通じて協調性を学んでもらうための部活動も行っている

「子どもたちは普段、自分自身を見つめているようで、実は見ていないんですね。でも発表をするうち、さまざまなことに気がつくんです。最初のうちは学校に行けないのは親のせいだったりします。でも、やっぱりこれは自分の問題だし、自分で努力しないといけないことなんだとわかってくるんですよ」

また、他の人の意見を聞くことで、自分と似ているところ、違うところが見えてくる。それを楽しむような姿勢も見えてきたという。

分科会の2部は、先の4つのテーマで意見を述べた。例えば「社会とは」。人間は一人で生きているのではなく、お互いに影響しあう複数の人間によって構成されていることを学んだ。社会と税金に関する学習においては税金を単なるお金ではなく自分の生活に深くかかわるものとして捉え、自分のなりたい職業やしたい生活を重ねてイメージできるようにリードしていった。最後にはお茶の出し方やネクタイの結び方など実際的なことも学んだ。

この勉強会をサポートした「フリースペースわたげ」施設長の秋田剛志さんは

「さまざまなことを考えたり、見聞きすることは全て自分のためになるということを、みんなは学んだし、考え方が違うということも間違いではないんだということも学んだと思います。文字にすると堅苦しい『社会』も、実はみながいっしょに楽しく生きている場所なんだということを知ったのも大きな成果でした」という。時間がたつにつれ、発言することにも慣れて、自信のある声に変わっていったそうだ。

参加したおよそ100人の子どもたちからは「初めての体験だったので最初は怖かったが、最後はワクワクした」というような声があがった。課題の発見も含めて、勉強会には予想以上の効果があった。今後は数年をかけたカリキュラムにし、ステップを設けて少しずつ前に進めるような仕組みづくりを行っていきたいと同会では考えている。

●担当者より　彼らを置き去りにすることは社会の損失でもあるのです。

NPO法人 わたげの会
理事長
秋田敦子さん

フリースペースわたげ
施設長
秋田剛志さん

おかげさまでたいへん有意義な体験ができました。彼らには能力があるのですから、なるべく若いうちにサポートをして最終的には社会の中で自立して生きていけるようにすべきです。放っておけば生活保護を受けることになる。それは社会の大きな損失でもあります。難しい問題が山積しておりますが、今後も努力してまいります。AJOSCの皆様にも今回のご縁を機に、子どもたちへの関心を高めていただければと考えております。